

第49回日本骨折治療学会学術集会

The 49th Annual Meeting of the Japanese Society for Fracture Repair

モーニングセミナー1



演
題

大腿骨転子部骨折治療の これまでの進歩

演
者

塩田 直史 先生 独立行政法人国立病院機構 岡山医療センター
整形外科・リハビリテーション科

演
題

固定しよう！ 大腿骨転子部骨折の 後外側骨片

演
者

横尾 賢 先生 独立行政法人国立病院機構 岡山医療センター
整形外科

日
時

2023年 **6月30日** (金)
7:30~8:30

会
場

第1会場
静岡県コンベンションアーツセンター グランシップ 1階 大地
〒422-8019 静岡県静岡市駿河区東静岡2-3-1

座
長

角田 雅也 先生
三田市民病院 院長

※本セミナーは日本整形外科学会の
教育研修単位《N》が取得できます。

日整会 必須分野：〔11〕骨盤・股関節疾患

共催：第49回日本骨折治療学会学術集会／HOYA Technosurgical株式会社

HOYA
TECHNOSURGICAL

大腿骨転子部骨折治療の最前線

大腿骨転子部骨折治療のこれまでの進歩

【演者】 **塩田 直史 先生** 独立行政法人国立病院機構 岡山医療センター 整形外科・リハビリテーション科

【はじめに】

大腿骨転子部骨折の治療には、Short femoral nail (SFN)による治療が多く行われている。かつての治療は、とすればインプラント挿入術となり、整復不足・内固定具の安定性の問題による成績不良例が散見されていた。近年の骨折型分類、インプラント選択、術中整復操作の進歩につき紹介する。

【3D-CTの活用による骨折型の判別】

分類法としては、AO/OTA分類が治療に直結し有用であると考えられる。安定型はAO/OTA分類の31A1であり、不安定型は31A2、A3である。しかし、小転子から大転子にいたる後外側骨片の評価は単純レントゲンでは困難である。これらの情報を正確につかみ治療に結びつけるには3D-CTを撮影すべきである。中野3D-CT分類は治療に直結し、整復操作やインプラントの選択にも有用である。

【インプラントの選択】

術前画像所見から、手術計画を立ててインプラントを準備すべきである。通常SFNを選択するが、髓腔挿入時にJammingをおこさないか検討しておく必要がある。また前・後側の骨片が大きく髓腔支持に不安がある症例においては、長さや髓腔径での安定性が得られるかどうかカギとなり、semi-long nailもしくはlong nailの使用を検討すべきである。

【術中整復】

骨折の整復操作は必須である。同部位では基本的に骨折部の整復が完了してから、インプラント挿入を行うべきである。まず前内側の骨性コンタクトを得ることにはじまる。確実に整復し、術中保持する工夫が必要である。またさらに後外側骨片の整復操作も必要で、外側に引き出しクランプ等で保持した方が、骨癒合に有利と考えている。

【まとめ】

1. 大腿骨転子部骨折の分類と3D-CTの役割
2. インプラントの選択
3. 術中整復操作

本講演では動画を交えつつ各項目について紹介する。

固定しよう! 大腿骨転子部骨折の後外側骨片

【演者】 **横尾 賢 先生** 独立行政法人国立病院機構 岡山医療センター 整形外科

大腿骨転子部骨折における術中整復として、骨頭骨片と骨幹部骨片のいわゆる主骨片同士の前皮質を組み合わせること、すなわち骨性コンタクトを得る重要性については広く認知されてきている。一方で、後外側骨片の整復や固定は今まで行われてこなかった。後外側骨片には中殿筋などの外転筋群が付着しており、転位した後外側骨片に対して整復や固定を行わなかった場合、偽関節の発生や外転筋力の減少につながることは想像に難くない。

当院での高齢者大腿骨転子部骨折に対する治療方針として、安定型に対してはsliding hip screw(以下SHS)を、不安定型に対してはintramedullary nail(以下IMN)を行っている。不安定型骨折の中で後外側骨片を含む症例に対しては、後外側骨片支持機構をエンドキャップに採用したUnicorn Nail Wing(以下UNW、HOYA Technosurgical株式会社)を使用し、後外側骨片の整復および保持を行っている。手術加療を行った高齢者大腿骨転子部骨折患者における退院直前の横歩きの可否(中殿筋の作用を判断する指標)について調査したところ、横歩き可能症例はSHS 10%、IMN 0%、UNW 44%であった。横歩き可能なSHS症例は全例が後外側骨片を伴わない安定型であったが、UNW症例は全例で後外側骨片を伴っていたものの、約半数で横歩きが可能となった。

後外側骨片を含む大腿骨転子部骨折へのUNWを用いた治療は、後外側骨片を支持することで中殿筋が作用し、術後早期から歩容安定化の獲得につながり、在宅復帰率、歩行能力再獲得等を向上させると考えている。本講演では、後外側骨片を固定・安定化させることの意義と有用性について、またUNWを用いる際のtips & pitfallsについて紹介する。